

平成30年 第2回斜里町議会定例会 全員協議会会議録

平成30年6月20日（水曜日）

開会 午後4時10分

閉会 午後5時14分

◇ 地方創生総合戦略の取り組み状況について ◇

●木村議長 それでは、ただ今から、会議規則第125条により、全員協議会を開きます。

はじめに、地方創生総合戦略の取り組み状況について説明を受けます。伊藤企画総務課長。

●伊藤企画総務課長 （地方創生総合戦略の取り組み状況について 内容説明 記載省略）

●木村議長 説明が終わりましたので、ここで、質疑を受けたいと思います。ご質疑ございませんか。久野議員。

●久野議員 二点、質問します。まず、知床観光ブランディング事業と、まちなか研修施設再構築事業です。

最初に、知床観光ブランディング事業の中に、サケ日本一PRの観光ブランディングから発展的な展開を意識してやる。今年度は訴求力、訴える力を向上させPRするという意味だと思うのですが、確かにポテトカードなどは訴求力は向上したのではないかと。

ただ、ポテトカードなど推進していくためには、個々の店舗の見直しや魅力あるものを作っていかねばならないと思いますが、それらの取り組みは、ただ今年度は訴求力だけやって、例えばお店でいえばメニューの刷新などをして、実際中身などはどうするのか、放っておくのか、これからどうなるのかを聞いたかったです。それができないと、こういうブランディングの表面だけをやっても観光客は離れていくような感じがしてならないです。これからの展開ということでお聞きしたいと思います。

●木村議長 河井課長。

●河井商工観光課長 議員ご指摘のとおり、現在はまず大きな目的として新しい知床のイメージを、比較的中長期的な視点で組み立てながら試行錯誤してきた2年であり3年ですが、そういったことを個々の現場の一つ一つの事業者の方たちが、それをどのように受け取って連動していくのかは、議員おっしゃるとおりの課題だと思います。

ただ、個々のメニュー開発などを支援するのがこの事業の直接的な目的ではなく、商品デザインのリニューアル支援事業などもそうですが、個々の商品力そのものは個々の事業者に委ねながらも、その見せ方をこちらが補助している段階で、そういうのが上手いければ、またその次の商品力そのものの向上などへの支援も、今すでにチャレンジ事業があ

りますが、そういったものを複合して展開するのがよいと考えています。

●木村議長 久野議員。

●久野議員 現在は訴求力ということで見せ方を重視した、これがきちんとあらたまって気持ち的にもさあやるぞというのが狙いで、その他の実働というか中身に対しては、これから何かの事業に結び付けていくなどそういう考えがあるのでしょうか。

●木村議長 河井課長。

●河井商工観光課長 その辺は具体的に決めていませんが、今回、私どもがやっているブランディングに協調して動いている事業者がいて、こういうようにやっていくとお客さんの受けがよいと思って、私どもが作ったロゴを使っている事業者もいるし、そういうメインの考え方というかコンセプトのようなものを援用している方もいます。

それなりにマーケティングに基づいてやっているという意味では、そういったものをどんどん活用していただくのがよいと思いますが、個々の事業者にこのように一緒にやりましょうという段階まで至っていないのが現状です。

●木村議長 久野議員。

●久野議員 ぜひ内部まで浸透するような施策というか、これをつなげていっていただきたいと思いますがいかがでしょうか。

●木村議長 河井課長。

●河井商工観光課長 議員ご指摘の点は、小規模企業振興条例の計画策定の中で同様の議論があり、個々のチャレンジ事業のような補助金もよいけれども、全体をサポートするような体制があったほうが、むしろモチベーションが上がって個々の事業者の展開が軌道に乗りやすいという議論が出ています。金融機関やマーケティングデータ、ブランディングなどを後方支援する形のほうがよいのではないかという議論がありますので、そういった議論の状況も見ながら、商工会になるか観光協会になるかは現時点ではわかりませんが、いずれにしてもご指摘のような視点で検討を進めたいと思います。

●木村議長 久野議員。

●久野議員 次のページの、まちなか研修施設のワーキングスペースの充実とありますが、これはどのようなものを具体的に指すのでしょうか。

●木村議長 河井課長。

●河井商工観光課長 今回、主に改修するのは、産業会館の1階の奥、現在、会議室で使われているところと、調理室やボイラー室などを改修して会議室や研修室などに改修するような工事と、2階の奥の和室を個室のワーキングスペースをできれば2室用意したいというのが一つ。そこに至る廊下の部分にカウンター状と個室形式のワーキングブースのようなものを設けて、例えばビジネスで斜里に来て、空き時間があって少し仕事をしたい方や、新しく事業を始めてまだ事務所を持ってないけれども、いろいろなことをやってみたい方が仮事務所のような形でするような場所のイメージを持っています。

都市部でこのような需要が増加していることは、いろいろ聞いており、斜里にもこのような場所があるとありがたいというお話を聞いていますので、どの程度応えられるか、需要があるかも多少見込みで動いているところではありますが、そういった環境づくりを進めていきたいと思います。

●木村議長 久野議員。

●久野議員 産業会館の複合施設で、観光協会も商工会も入っていて、このようなワーキングスペースを作っていただいて、そのような研修をやっていただくのは大変嬉しいと思います、7300万円くらい掛けて。

ただ、商工会で実働されている青年部から、危機感というかお願いを聞いてほしいのですが、青年部はふらっとナイトや盆踊り、各種事業を支えている。現在、ボイラー室の奥のほうを機材庫にして、1階のそこから迅速に各種事業に対して機材を持ち出して展開する。ところがこのワーキングスペースを作ることによって、それらが使えなくなって、3階に全部移動することになると聞いています。そうすると、人数も少ない、時間も限られてぎりぎりの仕事までやって、ふらっとナイトや盆踊り、各種事業をするのに行っているのに、3階からいちいち下ろしてきて、また3階に収納するという大変困ったことになったと聞いています。

役場でもそのようなことはしないと思います。一番使う方々、実働部隊がいちいち3階から下ろしてくるといえるのは、間違ったやり方ではないか。いくらワーキングスペースだとか、いつ来るかわからないような研修のために、そういうものを使って、斜里町のために、今、一生懸命やっている実働のスペースをどうして取らないのか。これは青年部のほとんどの会員が思っている、ぜひ言ってください、このワーキングスペース、まちなか研修施設構築事業に対して我々はこう思っていると言っていましたので、その件に対してどう思っているのか質問しました。

●木村議長 河井課長。

●河井商工観光課長 現在、2階の奥の和室は女性部、1階の奥のボイラー室は青年部の物品庫として使われていることは承知しています。それを全てどけてくださいという別の場所に移動してくださいと一方的に言っているわけでは決してなくて、おそらく今のお話は、工事をやっている期間、一時的に別の場所に仮置きしなければいけないという話があり、その話ではないかと思います。

別途、北側のほうに物置を作れないかという話は、設計上の協議でもきちんと話はしていますし、女性部や青年部の動きも加味したことを当然考えていますので、なぜ3階に物を動かすような話が出ているのか詳しくは承知していませんが、そのようなことを私どもと商工会との間でお話ししたことはないのが実情です。

●木村議長 久野議員。

●久野議員 仮の収納スペースを考えていることは聞いていますが、それが実現するかど

うかは、まだ皆わからないと言っていましたので、ぜひ使い勝手のよいように対策を練っていただきたいと考えますがいかがでしょうか。

●木村議長 河井課長。

●河井商工観光課長 商工会の青年部、女性部の活動に支障がないように改修することを意識してやっていますので、稀有な懸念というか私どもも対策を考えているということだけを申し上げておきたいと思います。

●木村議長 他、ございませんか。櫻井議員。

●櫻井議員 観光ブランディングに関連することで伺います。ここまでいろいろな形で組み立てて、一つの観光のイメージ作りをされている部分ではよく続いているし、それがどんどん浸透しているイメージを受けています。

一方で、以前出されていたSHIRETOKO! SUSTAINABLEに関連しては、今どういう取り扱いになって、あの時に出した、SHIRETOKO! SUSTAINABLE、海と、森と、人。を展開しているPRのサイトをなかなか探せなかったです。当初出た時にいくつか見て、おもしろいしデザイン的に優れている。これがどういう形で観光ブランドイメージに結び付いていくのかと2年前に思っていました。現在、これとのリンクや、どういう形で実際に作ったウェブサイトは運営されているのかを伺います。

●木村議長 河井課長。

●河井商工観光課長 ブックとウェブですが、ウェブのほうは、元々議員からご指摘のように、更新というか思ったようなイメージではまだ進行していないのが現状で、多機能化を図っていこうという考え方自体は変わっていないのですが、現在はガイドたちが投稿しているものを、一部ほぼ毎日のように貼りながら維持を続けている実態です。この後、漁業のブランディングなどはこのページにぶら下げる、物販系をぶら下げていくなどそういう構想自体は変わっていないので、もう少しお時間をいただきたいのが実情です。

ブランドブックに関しては、無料版と有料版があって、有料版は700～800冊くらい売っていますが、全国の30数店舗くらいで個別に取り扱ってもらっていて、各店舗での販売数量は10冊程度と少量ですが、そういうのをこちらに定期的に打診があって、こういうのを発行していると聞いたので、私のところで売れないかという連絡がそれなりに入ってきています。

こちらにいるとなかなかわかりづらいのですが、都市部の方たちから見ると、とても斬新というか画期的なもののように映っているようで、いろいろな雑誌にも取り上げられたり、企業の方が来た時にそういうのを配ると、社交辞令かもしれませんが褒めの言葉をいただくことがとても多いところで、もう少しするとじわじわ効果がどんどん出てくるのではないかと信じてやっています。

●木村議長 櫻井議員。

●櫻井議員 人気が出ていく商品というのは、4年、5年という下積みがあって、いきな

りいろいろなところで急に出てくるのは常だと思います。今、課長がおっしゃっていた部分をつづけていく、その効果は、即マスコミで取り上げられて一時的に大きくなってしぼんでしまうものであってはならないと思います。そういった意味でも、例えばSUSTAINABLEのサイトが、観光協会のホームページとリンクしてもよいと思います。そこで一つずつと訴えていくのは訴求力につながると思いますし、それこそSUSTAINABLE、持続可能でずっと生きていくものだと思いますので、今、SHIRETOKO! SUSTAINABLE、これで検索すると出てくるサイトです。これを毎日更新というのはフェイスブックか何かのほうだと思いますが、それだけではなく、基盤となるコンセプトを明確にうたっているところのサイトは、常にどこかでリンクを貼っていく。それが長い時間経って非常に価値があるものになっていくというコンセプトだったと思います。

やっている最中はつまらない更新になるかもしれませんが、その積み重ねがおそらく今目指している観光につながると思うので、持続可能性という意識で継続、それを一度に広げるということではなくて、オファーがあったところには、サイトの紹介もしながらつなげていく取り組みは、地道にやっつけていかなければならないと思いますが、その辺いかがでしょうか。

●木村議長 河井課長。

●河井商工観光課長 議員おっしゃっていることは承知していますので、去年は1万8千ページビューくらいでした。観光協会のまだ100分の1くらいです。アクセス分析などをすると、1番多いのが札幌、2番目が斜里、3番目が台湾となっています。なぜ台湾かというと、流水フェスや台湾のライフスタイルイベントに受託業者が出店して、それと引き換えにトコさんグッズを渡すことを地道にやっつけているので、そういったことで台湾の若い女性に一定のファンがいることまではわかっています。確かにそれは特殊な例かもしれませんが、そういうことを地道に続けていかなければと考えています。

●木村議長 櫻井議員。

●櫻井議員 華やかな観光の裏には、さまざまところで発信元が種を蒔いているという発想が、これからは持続可能な大きなポイントだと思います。そのさまざまところに一粒でも二粒でも地道に種を蒔き続けていくシステムを、もうじきこの事業は終わりますが、この事業が終わった後に地道につなげていく、そういう道筋と取り組みとシステムというのは、役場はそういうことが苦手なところかもしれないと最近気付いてきたのですが、その継続性という部分ではぜひ続けていっていただきたいと思います。続けていけますか。

●木村議長 河井課長。

●河井商工観光課長 ご指摘のとおりで、今回、約束の3年が経過するので、次年度、誰にどのように引き渡すか、あるいは継続していくかを問われることは重々承知でやっていますので、今年度は特にそういった継続性やどうやって発展させていくかを意識しながら取り組んでいきたいと考えています。

●木村議長 他、ございませんか。久保議員。

●久保議員 伊藤課長に聞くのですが、この表の見方ですが、先ほど説明で30年度で終わりという話をしながら、30年度以降見込みという書き方は何を意味しているのですか。

●木村議長 伊藤課長。

●伊藤企画総務課長 大変失礼いたしました。非常に紛らわしい資料だったと思いますが、実は昨年資料を活用したもので、昨年もこの欄は平成30年度以降と記載していました。それを30年度のみとしようかどうかと迷ったのですが、一応前段の説明で30年度をもってと説明をしたので、30年度で終わりというご理解をいただけるかと思って30年度以降と記載したのですが、非常にわかりづらいところでしたので、30年度以降というよりは30年度で終わりということで記載しました。

●木村議長 久保議員。

●久保議員 そうだと思いますが、こう見ると30年度はこの金額だけれども、31年度以降もこの金額で想定するのかと一瞬思いました。

介護マンパワーなどのそれぞれの事業が終わりますが、これについての成果、評価をどの時点にして、31年度以降につなげる、予算化することはどのように具体的に考えていますか。

●木村議長 伊藤課長。

●伊藤企画総務課長 所管しているテレワーク事業だけに限らず、この三つの事業については、先ほど商工観光課長からも申し上げたとおり、3年間の、28年、29年、30年で終了します。基本的に地方創生の事業の取り組みは、3年の交付金の終了後、自走ですか、その補助金が終わってから事業が終わるのではなく、自立をしながら事業を進めていくのが本来の狙いですので、この3年間の効果、検証を見極めながら、12月くらいには何らかの次年度への方向を示していけたらと考えています。

●木村議長 他、ございませんか。ないようでございますので、以上をもちまして、地方創生総合戦略の取り組み状況についての質疑を終了いたします。

午後4時39分

◇ エコクリーンセンターの課題への対応状況について ◇

●木村議長 次に、エコクリーンセンターの課題への対応状況について説明を受けます。増田環境課長。

●増田環境課長 (エコクリーンセンターの課題への対応状況について 内容説明 記載省略)

●木村議長 説明が終わりましたので、質疑を受けます。ご質疑ございませんか。櫻井議員。

●櫻井議員 1ページの、この表ですが、平成29年6月時点というのは、ここの黒いところの、左側寄りの項目、現状、今後の対策までが29年6月時点と読んでよいですか。

●木村議長 増田課長。

●増田環境課長 そのとおりです。太線で囲んだ部分が29年度の部分になります。

●木村議長 櫻井議員。

●櫻井議員 その隣の、真っ黒くなって潰れているのでわからないのですが、その次の現状、今後の対策は、これが30年6月現在ですか。

●木村議長 増田課長。

●増田環境課長 おっしゃるとおりです。

●木村議長 櫻井議員。

●櫻井議員 できれば白抜きで上に入れてくれたら苦労しなかったと思います。それで表の見方がすんなりしたのですが、2ページを見て、結局、平成28年度から平成29年度にかけて折れ線で示されている保管生成物量が大きく減っています。大きく減っているのは、使う部分が増えた。ここで大きく減っているということは、全体で出る生成物量は、例えば平成28年度と29年度は、一般ごみを処理してできる余剰物ではなく生成物の量は、ここの中からどこを足せばその量が出るのでしょうか。

●木村議長 増田課長。

●増田環境課長 まず、生成物というものは、ペレット化されたものになります。これは長くペレットの状態でも保管することが難しいものになっています。

ここでいうと、棒グラフのうち例えば29年度の場合、みらいあーるの灰色の部分と病院の斜線の部分、その上の道内製鉄工場で使用した点の489トンの部分までがペレットでの使用量になります。132トン、上にあるのがペレットではなくてパウダーの部分になります。今回は、パウダーの部分の白の132トンと保管場にパウダーの状態であるもの、昨年2322トンあったのが今回1885トンに減っていますが、その差が引き算すると437トン。その二つを足した部分が、道南のセメント工場にパウダーとして出荷したことになり、この部分が減少しているということです。

●木村議長 北部長。

●北総務部長 おそらく議員が聞きたいのは、生成物はいくら生産したのかということで、ここはこの図にあるとおり全部足し算した部分で、1093トンになります。ただし、これにはいろいろからくりがありまして、ご存知のとおり一般ごみと粗大ごみから減量化して出てくるのですが、当然作った時はもっと出ます。全体としては1253トン出ています。

そこから生成過程でかなり重みが蒸散します。実質的に製品化や粉体として出した時には、1093トンという値になっていると押さえていただきたいと思います。

●木村議長 櫻井議員。

●櫻井議員 今、聞いているのは、高温高圧処理の中で処理するごみの量の上限を、段々減ってくるかもしれないという形でいろいろな手を打ってきました。高温高圧の中で処理する部分の減りが出ているのか気になっていたのですが、全体で出てくる生成物の量の変化が気になりました。

もう一点、最初に質問した部分の、保管生成物量がこれだけ大きく減ったのは、減った量に関してはわかります。でも、これだけ減っているというのは、それだけ使うところが増えたということですか。

●木村議長 増田課長。

●増田環境課長 この減った分は、基本的には粉体としてセメント工場に出荷した部分になります。

●木村議長 櫻井議員。

●櫻井議員 確認します。粉体で送った分が増えたから、これだけトン数が減ったのですか。今までのペレット化などでどんどん保管生成物量はずっと増えてきていました。それはとても不安だったので、その関係と生成物がどれくらい出てくるかでいくと、この437トン減っているのは、何でだろう。今までと比べて何が変わったのかという点です。

●木村議長 北部長。

●北総務部長 議員おっしゃったとおりこれには二つ要素があります。単年度の中で収支が合うことが一つ。昨年ここでみているとおり、それぞれ資源化ボイラーの使用量も増えている。さらには製鉄所のペレットでの搬出量も増えていることで、収支均衡に近づいたことがあって、新たな生成物がたくさん出てこない。先の5年間のセメント工場への収支計画の中では、毎年200トンくらい余剰が出てくる計算でみていました。それが132トンという値になっているということは、その分減ってきているということです。もう一つの要素は、外部処理が予定どおり進んでいるということです。

●木村議長 若木議員。

●若木議員 生ごみ堆肥で、堆肥販売量が、29年が227トンで前年度より50トン増えています。増えている分は、生ごみの量が増えているのか、それとも優良な堆肥を作れる技術が向上したのか、どのような理由になりますか。

●木村議長 増田課長。

●増田環境課長 生ごみの量が増えたのではなくて、堆肥化するノウハウが現場でもかなり蓄積してきて順調に堆肥を生産できたことが、この増加になっています。

●木村議長 若木議員。

●若木議員 今後の対策のところ、堆肥販売量の増加への取り組みとありますが、技術が向上したことで売れる堆肥ができた時に、農業者の方が有効なものであれば引く手あまたなどあるのかと思ったのですが、そこはまだまだ理解度が進んでいないなど課題があるのでしょうか。

●木村議長 増田課長。

●増田環境課長 現状ではまだ試行錯誤を繰り返している状況で、飛躍的にその生産量が増えることは、まだ難しいかと思いますが、将来的にはそういうこともあるかと思いますが。現状では処理をしながら堆肥を確実に作ることに四苦八苦しなからやっている。発酵させながら、生き物を飼うのと同じようなことをしていますので、日々、試行錯誤しながらできるだけ安定的に生産できるように、今、工夫しているところです。

●木村議長 若木議員。

●若木議員 今後、量が増えていくので、その販売先の確保の取り組みかと思ったのですが、そうではないのですか。

●木村議長 北部長。

●北総務部長 この堆肥の供給先ですが、地元越川地区との協議を進めてきた中で、優先的に配布する約束している部分です。堆肥の性能も上がってきて、喜んで持って行ってもらっていますが、それをまた余るほどではないので、まだよそには持って行けるまでにはっていない。越川でほかに回してもよいということになれば話は別ですが、今のところは越川の営農集団の中で引き取られているということです。

●木村議長 若木議員。

●若木議員 生ごみの水切り徹底周知の継続とありますが、生ごみの小さな袋が去年できて、水の量も減ってきたことも実現できていると思います。3月の時に言った、袋が弱いのではないか、すぐに分解が進むのではないかと6月までの間に複数の方から同じような意見を聞いたのですが、3月の時にはそういう意見はないというお話でした。今の段階でもそういう声は寄せられていないでしょうか。

●木村議長 増田課長。

●増田環境課長 袋が弱いなどというお話は時々寄せられることがあります。そもそも袋の全てが同じように抜けるなどの場合はお取替えをしているのですが、全くないわけではなくて、弱かったというご意見はいただいています。

●木村議長 若木議員。

●若木議員 その中でお話した時に、分解するものなので、小清水町の場合は、出す当日に入れるという周知徹底を図っている。分解することが堆肥化する時に必要なごみ袋であれば、取り扱いが面倒くさくなるかもしれないですが、そちらのほうへの周知というか考え方を変えていくことも検討していかないと、弱いという評判だけになってしまうと感じたのですが、そのような考えはないでしょうか。

●木村議長 増田課長。

●増田環境課長 強度と分解性が相反する二つを両立させることが難しいのですが、町民の方にその点のご理解を深めていただくことは必要だと思います。特に、これから夏に向けて例年生ごみの水分量が増える時期になってきますので、生ごみの堆肥化が上手くいく

ように、その部分での水切りなどもさらにもお願いする。その袋の機能も併せてご説明することは進めていきたいと考えています。

●木村議長 櫻井議員。

●櫻井議員 生分解性の生ごみ袋を使って、当初分解しないごみ袋の時には残渣が非常に多い。その非常に多い部分を高温高压処理のほうに持って行って、それも増えている一つの原因でした。

28年度、29年度で使い始めている時ですが、あきらかに変化、分解されないで出たごみ袋に付着したその他のいろいろが山になっていましたが、それは確実に減った成果に関してと、その量が今回のある程度減ってきている部分に反映されていると考えてよろしいでしょうか。生分解性の袋を使った成果。いろいろ使いにくいなどの声は出ていますが、最終的に選択がごみ処理にプラスになっているかデータの的にはどうなのかを伺います。

●木村議長 北部長。

●北総務部長 生分解性ごみ袋を入れる一番の目的が、残渣を少なくしたい。すなわち残渣が生まれなくて堆肥量も増えるという一石二鳥という部分だったのですが、その数字は出てきていると考えています。

ただし、今回、小型化をやったのですが、いまいち需要の伸びが少ないのは残念な部分です。大体数量でいくと15リットルが10の部分でいうと3、7リットルが5、4リットルが2という割合で消費されているということで、もう少し小口の部分も宣伝していかなければならないと思います。

若木議員からあった生分解性ごみ袋の品質ですが、本来の機能というか性質のものと相容れない部分はありますが、少しでも向上できないかという中で、当初は3色刷りであったものを2色刷りにしました。特に接合分については透明にして強化を図りました。

小清水が使っているものとの違いは、うちは黄色く着色しています。これが弱さの元なのです。これをどうしていくかを、環境審議会の委員の方にもお話はさせていただいているのですが、いろいろ検討させていただくこともあると考えているところです。

●木村議長 櫻井議員。

●櫻井議員 4リットルの普及の部分では、私自身、夏場はほとんど生ごみを出すことはなく、冬はずっと出しています。7リットルを買って4リットルをメインで使うのですが、やはり4リットルでは心もとないところが出てきています。

部長がおっしゃっていた黄色いほうは、今まで生分解性を使っていてほとんど破れたことがないです。最大で冬場でしたら2週間ちょっと入れた状態で追加して入れていきます。もちろん新聞紙で包むのですが、新聞紙に包んで出す時に破れたことが一度ありました。

試したのですが、同じような出し方をして、新聞紙の角で縦割りです。その角の縦割りを黄色いところではなくて透明なところに当てたら持つのです。何回も試してみました。

やはり塗料の部分は硬化しています、繊維の縦に。何人かのお母さんたちと一緒に試したのですが、同じことを皆さんおっしゃっていました。

ただ、新聞紙に包むのは、新聞を取っていないお宅が最近が増えてきているので、それに関しては何がよいのかと言われます。その辺を含めて周知して、新聞紙に全然包んでいない方も3人くらいいますが、その方々の出し方も段々工夫されてよい形になってきていると思うので、周知していくしかないのかと思いますが、成果が出ているのはよかったです。

単純にごみの量が減ったなどだけではなく、全体的にプラスチックごみの扱いは、これから世界的にセンシティブになっていかなければならないと思いますので、その取り組みとしては全体的な環境面で、プラスチックの海洋ごみの問題などにもつながると思いますので、もう少し検証しながらもこのよい取り組みは続けていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

●木村議長 北部長。

●北総務部長 中に入れるのは、本来筋ではないのですが、いろいろな工夫をする中でご協力いただきたい部分では新聞紙もあるでしょうし、また、ティッシュペーパーを中に入れるなどもしていただきたいと考えたりしています。

廃プラスチックは、今、だぶつき気味といえますか、少し話はずれますがそういう部分の中では、資源の部分を考えて対応したいこともありますし、廃プラスチックでいくと先ほどのペレットの需要ですと、廃プラスチック、さらには製紙業界のスラッジの価格が落ちてきているのが脅威です。そういう情勢も見極めながら、前々言っていたブリケットにも生成物を活用できる方向ができればよいのですが、あまりよろしくない状況になってきているのが現状です。去年から今年にかけては、ペレットの出荷などはよい方向で動いていたのですが、鉄鋼需要が下がってきていることや製紙スラッジの価格が製紙業界の不振によって下がってきていること、廃プラスチックが余ってきて副資材の価格も下がってきている。ここが頭の痛いところです。

●木村議長 若木議員。

●若木議員 もう一点、事業系生ごみ収集の対応検討が今後の対策になっていますが、具体的な内容を教えてください。

●木村議長 増田課長。

●増田環境課長 事業系生ごみ収集に関しては、量的にもかなり多いこともあり、それをいかに効率的に回収して資源化していくかが、一つ課題になっています。家庭の回収の方法とまた違う形での回収は、将来的なことですが回収の方法を検討していく必要があると考えています。

●木村議長 佐々木議員。

●佐々木議員 それに関連してですが、事業系の回収を考えているのですか。町で回収を

考えているのですか。

●木村議長 増田課長。

●増田環境課長 そういうことではありません。

●木村議長 他、ございませんか。金盛議員。

●金盛議員 1ページの表の一番下、カッコ4の病院のバイオボイラーのところ、29年、30年の2カ年の記載があるのですが、現状と今後の対策がいずれも同じような書き方になっています。これについて現状のところでは計器類について故障があるということと、多少30年度で検証したということですが、これとはまた別に今後の対策として長寿命化もいわれているのです。文章の印象としては、計器類というと本当の部分的な故障と受け止めて、それと長寿命化というと主体部を含めた長寿命化対策が必要とも読めるのですが、これはそのように読んでよいですか。

●木村議長 増田課長。

●増田環境課長 これに関しては、塩素の影響が大きいということで、全体的にボイラーの劣化がいろいろところで予期せぬ形で出てくることがあります。早めに対策というか対応をしていくことで長寿命化を図るという意味で記載させていただいています。

●木村議長 金盛議員。

●金盛議員 ボイラー本体については考える必要があるということだと思いますが、これは具体的にあとどれくらいなどそういう見通しの中での対策とお考えですか。それとも塩素の問題があるから、これはいずれ近いうちというくらいの判断なのか、その辺についてはどうですか。

●木村議長 北部長。

●北総務部長 ここにあるとおり、計器類の故障が頻繁に起こります。ただ、このボイラーの場合、当初から考えているのは、取り換え可能な部分で導入しようということで、中のかき混ぜ棒的な部分や壁のブロック部分なども、できるだけ交換をきちんとしていきましょう、全体を持たせませしょうという意味で書いています。

●木村議長 金盛議員。

●金盛議員 そうしますと、丸ごと全部交換しなければならないという前提ではなく、できるだけ部品を取り換えながら使い続けたいということですね。

●木村議長 他、ございませんか。ないようでございますので、以上をもちまして、エコクリーンセンターの課題への対応状況についての質疑を終了いたします。以上で、本日の全員協議会を閉じます。

午後5時14分